

考古学からみた民族考古学の牧畜遺跡¹⁾同定の 指標についての検討

— 草創期から前期ホライズン²⁾に属するペルー海岸部の遺跡を
対象とした同定作業を通じて —

大 谷 博 則*

Study of an ethnoarcheological index to identify pastoral site
from the viewpoint of archaeology

— Through identification intended for sites of the Peruvian coast
from Initial Period to Early Horizon —

Hironori OTANI

要 旨

本稿では、民族考古学で行われている遺跡形成の分野から提示された遺跡同定の指標について、考古学の立場から検討している。対象としている地域はペルー海岸部（コスタ）であり、時代は草創期から前期ホライズンとしている。対象としている遺跡はラクダ科動物遺存体が出土した遺跡である。この地域では、ラクダ科動物（リヤマ・アルパカ）が家畜化されており、対象遺跡が牧畜遺跡であるか否かについて、民族考古学から提示された指標を基に検討している。その結果、データ収集の段階で考古学の側になりに問題があることが示された。民族考古学の側には、交易に関連する遺跡についてのタフノミー研究が不足していることが認められた。

はじめに

私は修士論文で、草創期から前期ホライズンに属する、ペルー北海岸から中央海岸に位置する牧畜遺跡を類型化しようと試みました。しかし、牧畜遺跡同定の指標や、そのデータ処理が異なっており、類型化は困難であるという状況が明らかになりました。これは、考古資料の性質として出土しないものは扱えない点や、調査の目的に応じて資料収集、その後のデータ処理が異なることは避けられない点によるものであり、仕方のない状況と考えられる。

このような状況にあるものの、何らかの妥当な指標をもって、牧畜遺跡であるか否かを同定する必要があるものと思われる。なぜならば、複数の遺跡を対象に分析を行うためには、同じ指標で同定しなければ、信頼性が損なわれるからである。そのために、本稿では、アンデス南高地を

平成18年9月29日受理 *文学研究科

対象とした民族考古学の研究成果³⁾を基に、これまで扱ってきた遺跡を再検討している。

本稿の目的は、牧畜遺跡同定の指標を考察する際に、考古学の立場から民族考古学にどのようなデータを求めているのかを提示することである。

I 牧畜遺跡の指標

この章では、クスナールによる民族考古学的調査を基に、牧畜遺跡を同定する際の指標を検討している。クスナールは、アンデス南高地のアワティマルカで、ヤギを飼育しているアイマラ牧民を対象とした民族考古学調査を行っている。同地域では、牧民により利用されていたと考えられるアサナ遺跡があり、牧畜遺跡の解釈を行う上で、民族考古学的データを収集するには妥当な地域であると考えられる。

大林によると⁴⁾、民族誌から考古資料を類推する際に、以下に注意する必要があるとしている。

①両者とも類似した生態系の中に存在し、②文化的系統を同じくし、③類似した経済状態、ないしは、文化段階にあることである。海岸部の遺跡に適用する際に、①に関して、生態系が異なるという問題が生じてくる。しかし、海岸部で牧畜が行われていない現状を考慮するとクスナールのデータを利用することは妥当であるといえる。

以上で、民族誌データの適用に関して妥当性が確認されたものとし、以下では、クスナールによる牧畜遺跡同定の指標を採り上げている。

クスナールは、牧畜遺跡同定の指標として、①遺跡の立地、②コラル（家畜囲い）、③ベン⁵⁾（幼獣用の囲い）、④フンの堆積、⑤動物遺存体、⑥遺物を提示している。以下、各指標について、その適用の妥当性を検討している。

遺跡の立地に関して、牧草地との距離が重要であると分析している⁶⁾（表1）。しかし、表を確認すると、RB⁷⁾の場合、75%が水源の100m圏内に位置しており、TS⁸⁾の場合は減少し、25%が水源の200m圏内に位置している。補足すると、牧草地の場合、RBでは58%が100m圏内に、TSでは認められないという結果が示されている。海岸部においてラクダ科動物の利用を想定した場合、定住という問題が生じてくる。牧畜が中心となる環境帯と農業が中心となる環境帯と、生業基盤の違いに着目して仮説を構築する必要性が生じてくるものと思われる。そのため、遺跡の立地に関しては本稿では保留している。

コラルやベンといった遺構に関して、対象遺跡からベンの報告例がないため、遺構に関してはコラルのみを指標としている。クスナールにより報告されるベンは小規模な遺構⁹⁾であり、海岸部でも同様の規模と仮定した場合、現在まで残る可能性は低いと考えられる。以上から、本稿では牧畜遺跡の指標となる遺構はコラルだけとしている。

フンの堆積に関して、遺構同様、本稿ではその有無だけを扱っている。その堆積が本当にラクダ科動物のフンであるかどうかといった同定方法に関しては未確認である。

動物遺存体の分析に関して、MNI¹⁰⁾とMNE¹¹⁾という分析が必要となる。MNIにより、家畜構成を知り、その利用目的を明らかにし、MNEにより、農民との交易やチャルキ効果¹²⁾の可能性

表1 クスナールによる牧畜遺跡周辺の景観分析

	遺跡 (Site)	水 (Water)	ボフェダル (Bofedal)	泉 (Spring)	パンパ (Pampa)	山道 (Trail)	道路 (Road)
R B	1	100	*	*	0	100	*
	2	180	*	100	*	100	*
	3	50	30	*	*	100	800
	4	20	20	*	*	60	800
	5	100	*	*	0	100	200
	6	200	80	100	*	20	*
	7	50	*	*	*	0	500
	8	0	0	*	*	0	100
	9	*	*	*	*	0	120
	10	0	0	0	*	100	500
	11	*	200	200	*	200	80
T S	39	*	*	*	*	80	*
	AC1	*	*	*	*	80	*
	AC2	*	*	*	*	120	*
	AC3	100	*	*	*	50	*
	C3/C4	*	*	*	*	200	*

1. 遺跡 (Site) 以外の項目に記載されている数字は遺跡からの距離である (単位はm)。
2. *のマークは遺跡からの距離が遠すぎるため、記載していない。
3. ボフェダルは宙水により形成された沼沢地であり、イグサ科の植物 (*Distichia muscoides*, *Oxychloa andinum*) が繁茂している地形を指す。
4. 宙水とは透水層の中にある局所的な不透水層に遮られ本来の地下水面に達せず、それより上方に局所的に溜まったレンズ状の地下水塊を指す。
5. パンパとは牧草地を指す。

を考察することを目的としている。MNIとは、本来異なる種の相対的な量を把握するための分析であるが、齢査定¹³⁾などを行う場合、適当な年齢層¹⁴⁾の相対的な量を把握するために用いられることもある。齢査定後にMNIを行う目的は、対象遺跡での屠殺戦略を知り、利用目的を明らかにするためである。

遺物に関して、牧畜遺跡の指標となる遺物は有機物¹⁵⁾であることから、残存しにくい状況が考えられる。そのため、本稿では保留している。

考古学的に分析する場合、山間部と海岸部との土器の関係などを考慮する必要があるが、紙面の都合もあり、主題から外れるため本稿では保留している。

以上から、本稿で利用する牧畜遺跡の指標は、コラルの有無、ランの堆積の有無、動物遺存体分析の妥当性の3点である。

II 牧畜遺跡の分類

前章で整理したクスナールによる指標のうち本稿で利用するものは、コラルの有無とランの堆

積の有無、動物遺存体分析の妥当性の3点である。本稿で扱う遺跡の所在に関しては図を添付してある(図1)。また、時期区分に関しては表を添付してある(表2)。

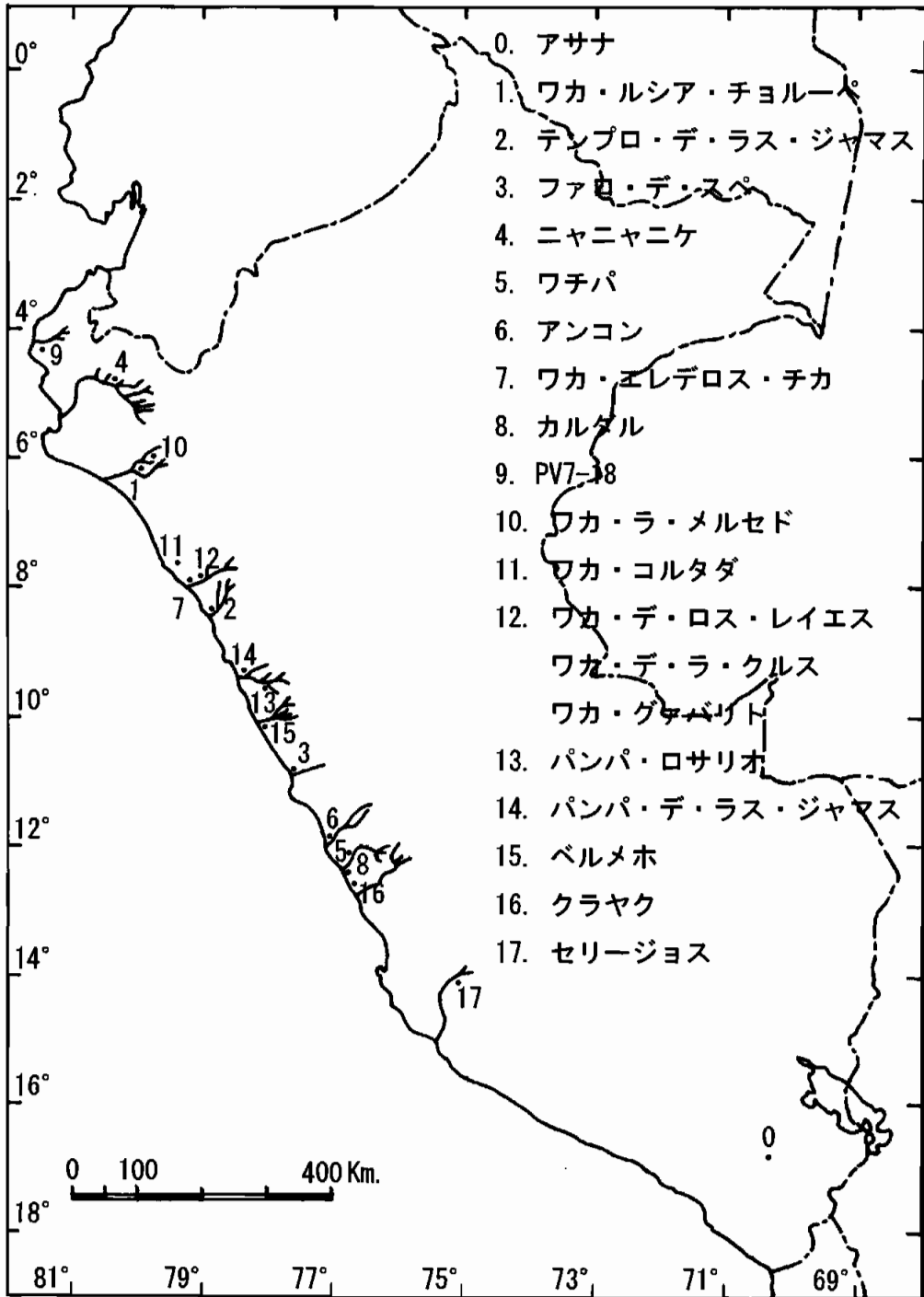


図1 遺跡分布図 (・が本稿での対象遺跡)

表2 編年表

	河谷名	遺跡名	草創期 (1800/1500B.C.-900B.C.)	前期ホライズン (900B.C.-200B.C.)	前期中間期 (200B.C.-500A.D.)
北海道	パリーニヤス	PV7-18		□□ →	
	ピウラ	ニヤニヤニケ		□□ →	
	ラ・レチュエ	ワカ・ルシア・チョルーベ		□□ →	
		ワカ・ラ・メルセド			□□ →
	モチエ	ワカ・エレデロス・チカ	□□ →		
		ワカ・コルタダ		□□ →	
		ワカ・デ・ロス・レイエス		□□ →	
		ワカ・デ・ラ・クルス		□□ →	
		ワカ・グアパリト		□□ →	
	ヴィルー	テンプロ・デ・ラス・ジャマス	□□ →		
	カスマ	パンパ・ロサリオ		□□ →	
		パンパ・デ・ラス・ジャマス		□□ →	
中央海岸	ワルメイ	ベルメホ		□□ →	
	スペ	ファロ・デ・スペ		□□ →	
	チヨン	アンコン		□□ →	
	ルリン	ワチパ		□□ →	
		カルダル		□□ →	
マラ	クラヤク		□□ →		
南海岸	イカ	セリージョス		□□ →	

この章では、あらためて、修士論文で利用したドゥッシオ・ボナビアのデータ¹⁶⁾を再検討している。以下では、前章で検討した指標を基に、適用可能性・同定可能性の有無により、3タイプに分類している。

以上から、対象遺跡を、前章で検討した指標が適用可能であり牧畜遺跡と同定される遺跡（タイプ1）、不適であるが牧畜遺跡の可能性のある遺跡（タイプ2）と適用可能であるが牧畜遺跡と同定するにはデータが不足している遺跡（タイプ3）に分類している。

i タイプ1

本節では、前章で検討した指標が適用可能であり、牧畜遺跡と同定される遺跡を採り上げている。

ラ・レチュエ谷、バタン・グランデ複合のワカ・ルシア・チョルーベ遺跡¹⁷⁾から報告例がある。この遺跡は草創期から前期ホライズンに属しており¹⁸⁾、ゴミ捨て場からラクダ科動物遺存体が報告されている。

以下の4点の根拠からこの遺跡ではラクダ科動物は重要なタンパク源として利用されていたと調査者は解釈している¹⁹⁾。

①ほぼ全ての層から出土している点、②若獣を含むほぼ全ての年齢層が確認されている点²⁰⁾、③出土部位に四肢骨と頭蓋骨が含まれるためチャルキ²¹⁾の可能性が低い点²²⁾、④大量のフンの堆積が出土している点である。

基本的に、この遺跡でラクダ科動物が飼育されていたと解釈されている。しかし、遺跡周辺にコラルや牧草地がないことから、河川の中流域など違う場所で飼育されていた可能性も、調査者により提示されている²³⁾。

牧畜遺跡同定の指標として、本稿では立地条件を扱わないため、遺跡周辺に牧草地がない点は保留している。

問題であるのはコラルの欠如であろう。クスナールによると、牧畜に関連する居住空間にはコラルが含まれているからである²⁴⁾。しかし、その他の条件を満たしているため、考古資料の性質など考慮すると、牧畜遺跡との解釈は妥当であるといえる。

草創期から前期ホライズンに属する、海岸部の遺跡を対象とした分析により、その他の遺跡は本稿で用いる指標を満たしていないという結果が示された。次節以降、それらの遺跡を採り上げている。

ii タイプ2

本節では、本稿で用いる指標が不適ではあるが、牧畜遺跡の可能性のある遺跡を採り上げている。

タイプ2は埋葬と交易に関連する2項目に分けられる。初めに、埋葬に関連する遺跡を2件、次に、交易に関連する遺跡を3件採り上げている。

埋葬に関連する遺跡として以下の2遺跡が挙げられる。初めに、ヴィルー谷、テンプロ・デ・ラス・ジャマス遺跡²⁵⁾から報告例がある。この遺跡は草創期に属しており、2度、ラクダ科動物の埋葬が報告されている。

初めに、ストロングとエヴァンズにより、4体のラクダ科動物の埋葬が²⁶⁾、次に、ウィレーにより、2体のラクダ科動物の埋葬が報告されている²⁷⁾。しかしウィレーによる報告は、ストロングとエヴァンズによる報告を誤って記載したものか、別のものかを明確に記載しておらず、不確かなものと解釈されている²⁸⁾。

ウィレーによると²⁹⁾、神への祈願のためにラクダ科動物を奉げていたと解釈している。その他にも、ヴィルー谷にはコラルが存在していたという報告もある。しかし、ラクダ科動物埋葬に関する出土状況図の欠如から、考古学的に解釈するのは難しいと考えられる。

次に、スペ谷、ファロ・デ・スペ遺跡³⁰⁾から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンに属しており、土壙Esqueleto No.8から人骨と共伴してリヤマの四肢骨と頭蓋骨が出土したと報告されている³¹⁾。残念ながら、出土状況図の欠如のため、テンプロ・デ・ラス・ジャマス遺跡同様、考古学的に解釈するのは難しいと考えられる。

以上から、ラクダ科動物の埋葬を解釈するにあたり、出土状況を記録しておくことが重要であることは明らかである。その上で、民族考古学に求めるデータがないかを次章にて検討している。

交易に関連する遺跡として以下の3遺跡が挙げられる。初めに、ピウラ谷、ニヤニヤニケ遺跡³²⁾から報告例がある。この遺跡は草創期末から前期ホライズンに属しており³³⁾、少量のラクダ科動物遺存体が報告されている。

出土した動物遺存体の年齢査定が行われており、シカ科動物は若獣が多く、ラクダ科動物は老獣が多いという結果が報告されている³⁴⁾。同時期のカハマルカ地方と類似した構成であり、カハマルカなど南部との長距離交易にラクダ科動物が利用されていた可能性が指摘されている。

次に、ルリン谷、ワチバ遺跡³⁵⁾から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンに属している。ラクダ科動物のMNIが83%であり、年齢査定によると、3%が成獣で、97%が若獣という結果が報告されている³⁶⁾。コラルが検出されていないことから、異なる生態階床と資源交換をしていたものと調査者は解釈している³⁷⁾。

ワチバ遺跡に関して、MNEが行われていない点が残念である。チャルキとして持ち込まれたのかなど検証する上で、必要な分析である。

最後に、チョン谷、アンコン遺跡³⁸⁾から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンに属している。ラクダ科動物遺存体は出土しておらず、フンの堆積だけが確認されている。そのため、駄獣として利用されていたと調査者は解釈している³⁹⁾。

埋葬に関する遺跡同様、次章にて、民族考古学に求めるデータを考察している。

iii タイプ3

本節では、本稿で用いる指標が適用可能であるが、牧畜遺跡と同定するにはデータが不足している遺跡を採り上げ、その傾向を示している。

モチェ谷、カバジョ・ムエルト複合のワカ・エレアロス・チカ遺跡⁴⁰⁾から報告例がある⁴¹⁾。この遺跡は草創期から前期ホライズンに属している。ラクダ科動物骨が4点出土し、ラクダ科動物のMNIが14.4%と報告されている⁴²⁾。カバジョ・ムエルト複合のラクダ科動物は体格がよいことから、おそらく家畜種が山間部を通して導入されたものと調査者は解釈している⁴³⁾。

ルリン谷、カルダル遺跡⁴⁴⁾から報告例がある。この遺跡は草創期から前期ホライズンに属している⁴⁵⁾。ラクダ科動物骨が少量出土しており、カルダル遺跡で、ラクダ科動物はタンパク源として重要な役割を果たしていたと調査者により解釈されている⁴⁶⁾。

パリーニャス谷、PV7-18遺跡⁴⁷⁾から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンから前期中間期に属しており⁴⁸⁾、ラクダ科動物のMNIが46.2%と報告されている⁴⁹⁾。

ラ・レチェ谷、ワカ・ラ・メルセド遺跡⁵⁰⁾から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンに属しており、ラクダ科動物のMNIが90%と報告されている⁵¹⁾。

モチェ谷、ワカ・コルタダ遺跡、ワカ・デ・ロス・レイエス遺跡、ワカ・デ・ラ・クルス遺跡、ワカ・グアバリート遺跡から報告例がある⁵²⁾。これらの遺跡は前期ホライズンに属しており、詳細な報告は行われていない⁵³⁾。

カスマ谷、パンパ・ロサリオ遺跡⁵⁴⁾から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンに属している。ゴミ捨て場から、ラクダ科動物遺存体とフンが出土している⁵⁵⁾。

カスマ谷、パンパ・デ・ラス・ジャマス遺跡⁵⁶⁾のワカAから報告例がある。この遺跡は前期ホ

ライズンに属しており、詳細な報告は行われていない⁵⁷⁾。

ワルメイ谷、ベルメホ遺跡⁵⁸⁾ から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンから前期中間期に属しており、ラクダ科動物のMNIが1%と報告されている⁵⁹⁾。

ルリン谷とマラ谷の間、クラヤク遺跡⁶⁰⁾ から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンに属しており、ラクダ科動物のMNIが0.4%と報告されている⁶¹⁾。

イカ谷、セリジョス遺跡⁶²⁾ から報告例がある。この遺跡は前期ホライズンに属しており、ほぼ全ての層からラクダ科動物遺存体が出土したと報告されている⁶³⁾。

これら13遺跡を考察してみると以下3点の傾向が認められる。①ラクダ科動物遺存体の有無、つまり科同定のみ報告されているケース、②出土点数が少ないため定量的な分析が行えないケース、③遺跡の立地（河川との距離や牧草地の有無など）に関して報告されていないケースの3点が挙げられる。

以上から、次章では、考古学的に牧畜遺跡を同定する際に、民族考古学に求めるデータを検討している。

Ⅲ 牧畜遺跡同定に不足しているデータ

この章では、タイプ2に分類される遺跡を対象とした分析結果を基に、本稿で用いる指標が適用できないケースを扱っている。つまり、前章で採り上げた、埋葬や交易に関連する遺跡を解釈する際に不足しているデータを整理している。

埋葬に関して、現在類似する行為が行われているわけではなく、民族考古学的調査を行うことは難しいと考えられる。

交易に関して、規模・件数ともに減少しているものの、現在でも確認が可能な行為である。その行為により残される痕跡の収集は、交易に関連する遺跡を解釈する際に必要になると考えられる。

これまで、草創期から前期ホライズンに属する、海岸部の遺跡を対象とした分析結果から、民族考古学で行われている牧畜関連の遺跡形成の分野に不足しているテーマが提示された。

おわりに

草創期から前期ホライズンに属する海岸部の遺跡を検討した結果、考古学の側に資料収集の段階でかなり問題があることが示された（タイプ3）。交易に関連する遺跡の形成過程については、今後、自身で民族考古学調査を行う予定である。また、本稿で保留したクスナールの指標については、今後、他稿にて検討したいと考えている。

注

- 1) 本稿で使われる牧畜遺跡とはpastoral siteの訳であり、ラクダ科動物を飼育する牧民と関連する遺跡全般を指している。
- 2) 本稿で使われている時期区分は、ボナヴィアによる編年を利用している。草創期が紀元前1,800/1,500から紀元前900年であり、前期ホライズンが紀元前900年から紀元前200年である。
- 3) Kuznar, 1995
- 4) 大林、1971
- 5) 幼獣をキツネやコンドルといった害獣や病原菌から守るための小型の家畜囲い。
- 6) クスナールは牧民の居住地を利用時期と期間でもって2タイプに分類している。以下で用いるRBとTSとは、チリ北東部サスセスを調査したヤコバッシオとマデロによる分類である。ここで、クスナールによる分類を用いていない理由は、呼称が地域的であるためである。そこで、類似した意味合いを持つ他の表現を借りて使用している。雨季に長期間利用するRB (Residential Base) と乾季に短期間利用するTS (Temporary Site) とである。RB・TSと周辺環境との関連性を分析している。それによると、RBの場合67%が牧草地の100m圏内に位置しているというデータに基づいている。牧民への聞き込み調査の結果も同様の結果である。
- 7) Residential Baseの略。雨季に長期間利用される牧民の居住地を意味する略語。
- 8) Temporary Siteの略。乾季に短期間利用される牧民の居住地を意味する略語。
- 9) Kuznar, 1995: 75, Table 6-1 平均2.13m²と記載されている。石やアドベにより作られており、容易に再利用される可能性が考えられる。
- 10) Minimum Number of Identifiedの略。日本語訳は最小個体数であり、異なる種の相対的な量に関心がある場合に利用する分析。
- 11) Minimum Number of Elementの略。骨格部位ごとにカウントする。各骨格部位の相対的な量に関心がある場合に利用する分析。
- 12) Miller, 1979 チャルキ生産地と消費地とで消費部位が異なるという報告例がある。消費部位の違いが、考古遺物として残されるラクダ科動物遺存体のMNEに認められることを指している。
- 13) 出土骨が何歳の時に殺されたのかに関心がある場合に利用する。
- 14) 「適当年齢層」とは、新生獣・幼獣・若獣・成獣・老獣といった年齢層を指している。
- 15) Kuznar, 1995: 94, Table7-1 投石紐と牧民の杖 (shepherd's crooksの訳) などが挙げられている。
- 16) Bonavia, 1996
- 17) ランバイエケ県フェレニャフェ郡パタボ区に位置する。
- 18) 紀元前1400/1300年頃から紀元後700/600年頃まで利用されていたと考えられている。
- 19) I. Shimada, M. Shimada, and Elera, 1982: 140-141
- 20) 調査者自身により、胎児と新生獣が出土していないという問題が指摘されているが、高地との環境の違いによると解釈されている。高地では、新生獣の死亡率が高いという報告がある。
- 21) アンデス地方高地で作られるラクダ科動物の干し肉である。
- 22) Miller, 1979: 97-100
- 23) Shimada and Shimada, 1985: 21
- 24) Kuznar, 1995: 94, Table7-1
- 25) ラ・リベルタッド県トゥルヒーヨ郡ヴィルー区に位置する。V71という略称、ワカ・ネグラ、ワカ・ブリエッタ・デ・ガニャーベといった、さまざまな名称を持つ遺跡である。
- 26) Strong and Evans, 1952: 27-34

- 27) Willey 1953: 44, 48, 56, 57
- 28) Bonavia, 1996: 143
- 29) Willey, 1953: 48
- 30) リマ県チャンカイ郡スベ・プエルト区に位置する。
- 31) Willey and Corbett, 1954: 140-141
- 32) チュルカナス郊外、ピウラ県モロボン郡チュルカナス区に位置する。
- 33) ニヤニヤニケ期 (紀元前11世紀から紀元前7世紀) に相当する。
- 34) Guffroy, 1992: 102
- 35) リマ県リマ郡アテ区に位置する。
- 36) Altamirano, 1983: 34
- 37) Altamirano, 1983: 34
- 38) リマ県リマ郡アンコン区に位置する。
- 39) Rosas Lanoire, 1970: 266
- 40) ラ・リベルタッド県、モチェ谷中流域 (海岸線から約17km) に位置する。
- 41) Pozorski, S. 1976: 101-102, 105, 111
- 42) Pozorski, S. 1976: 336; 1979: 169, Table5; Pozorski and Pozorski, 1979: 427, Table 4
- 43) Pozorski, S. and T. Pozorski, 1979: 430
- 44) リマ県リマ郡に位置する。
- 45) 紀元前1,170年から740年頃まで利用されていたと考えられている。
- 46) Burger and Salazar Burger, 1992: 124
- 47) ピウラ県タララ郡に位置する。
- 48) 紀元前450年頃から紀元後300/650年頃まで利用されていたと考えられている。
- 49) Wing, 1986: 259, Table 10.7
- 50) ランバイエケ県に位置する。
- 51) Shimada and Shimada, 1985: 8
- 52) これらの遺跡はラ・リベルタッド県に位置する。
- 53) Pozorski and Pozorski, 1979: 428
- 54) アンカシュ県カスマ郡、海岸線から16kmほど内陸部、海拔150mに位置する。
- 55) Pozorski and Pozorski, 1987: 70
- 56) アンカシュ県カスマ郡、カスマ川右岸サン・フランシスコ山の南側に位置する。
- 57) Tello, 1956: 52
- 58) アンカシュ県ワルメイ郡ワルメイ区に位置する。
- 59) Wing, 1977: Table 18
- 60) リマ県リマ郡ブクサナ区に位置する。
- 61) Wing, 1986: 259, Table 10.7
- 62) イカ県イカ郡サン・ホセ・デ・ロス・モリノス区に位置する。
- 63) Wallace, 1962: 312

文献

大林太良 1971「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2 (2) 奈良大学図書館
Altamirano Enciso, Alfredo 1983. La fauna de Huachipa, valle del Rimac. *Boletín*, No.8. Museo Nacional de

- Antropologia y Arqueologia. Lima.
- Bonavia, Duccio 1996. *Los Camelidos Sudamericanos (Un Introduccion a su Estudio)*. IFEA, Instituto Frznces de Estudios Andinos, Lima.
- Burger, Richard L.; Salazar-Burger, Lucy 1992, La segunda tempered de investigations en Carnal, vale de Lurin (1987). *Estudios de Arqueologia Peruana*, Duccio Bonavia, editor. Fomciencias. Lima. pp. 123-147.
- Guffroy, Jean 1992. Las tradiciones culturales formativa en el alto Piura. *Estudios de Arqueologia Peruana*. Duccio Bonavia, editor. Fomciencias. Lima. pp.99-121.
- Kuznar, Lawrence A. 1989. *Awatimarka: The ethnoarchaeology of an Andean Herding Community*. Harcourt Brace, Fort Worth, TX.
- Miller, George R. 1979, An introduction to the Ethnoarchaeology of the Andean Camelids. Doctoral Dissertation in Anthroporogy, Graduate Division of the University of California. Berkeley.
- Pozorski, Shelia G. 1976. Prehistoric Subsistence Patterns and Site Economics in the Moche Valley, Peru. Dissertation presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Texas at Austin in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy.
1979. Prehistoric diet and Subsistence of the Moche Valley, Peru. *World Archaeology*, 2 (2). London. pp.163-184.
- Pozorski, Shelia G.; Pozorski, Thomas 1979, An Early Subsistence Exchange System in the Moche Valley, Peru. *Journal of Field Archaeology* 6. Boston. pp.413-432.
1987. *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. University of Iowa Press. Iowa City.
- Ridell, Francis A.; Valdez, Lidio M. 1987- 1988 Hacha y la ocupacion temprana del valle de Acari. *Gaceta Arqueologica Andina*, Ano 4, Diciembre- Abril. No.16. Lima. pp. 6-10.
- Rosas, Lanoire, Hermilio 1970. La Secuencia Cultural del Period Formativo en Ancon. Tesis para obtener el grado de Bachiller en Arqueologia. Universidad Nacional Mayor de San Marcos. Lima.
- Shimada, Izumi; Elera Carlos G.; Shimada Melody 1982. Excavaciones efectuadas en el centro ceremonial de Huaca Lucia-Cholope, del Horizonte Temprano, Batan Grande, Costa Norte del Peru. *Arqueologicas*, 19. Museo Nacional de Antropologia y Arqueologia, Instituto Nacional de Cultura. Lima. pp.109-210.
- Shimada, Melody; Shimada, Izumi 1985. Prehistoric Llama Breeding and Herding on the North Coast of Peru. *American Antiquity*, Vol.50 (1). January Lawrence. pp.3-26.
- Strong, William Duncan; Evans Jr., Clifford 1952 *Cultural Stratigraphy in the Viru Valley, northern Peru. The Formative and Florescent Epochs*. Colombia Studies in Archaeology and Ethnology, 4. Colombia University Press. New York.
- Tello, Julio C. 1956. *Arqueologia del Valle de Casma. Culturas: Chavin, Santa o Huaylas Yungas y Sub-Chimu*. Publicacion Anthropologica del Archivo "Julio C. Tello" de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos. Volmen 1. Editorial San Marcos. Lima.
- Wallace, Dwight T. 1962. Cerrillos, an early Paracas site in Ica, Peru. *American Antiquity*, Vol.27 (3) January. Salt Lake City. pp.303-314.
- Wiley, Gordon R. 1953. *Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley, Peru*. Smithsonian Institution Press. Washington, D.C. London.
- Wiley, Gordon R.; Corbett, John M. 1954. *Early Ancon and Supe Culture. Chavin Horizon Sites of the Central Peruvian Coast*. Columbia University Press. New York.
- Wing, Elizabeth S. 1977. Prehistoric Subsistence Patterns of the Central Andes and Adjacent Coast and Spread on the use of Domestic Animals. Report NSF Soc 74-20634. Florida.

1986. Domestication of Andean Mammals. *High Altitude Tropical Biogeography*. F. Villeumier y Monasterio, editors. Oxford University Press Inc. New York. pp. 246-264.

Summary

I study of an ethnoarcheological index to identify pastoral site from the viewpoint archeology. I take sites reported about camels' remains as an object study, in the Peruvian coast from Initial Period to Early Horizon (1800-200 B.C.). Camels (Llama and Alpaca) are domesticated in the Andean highlands, and introduced into the Andean coast. In this paper, I analyzed by ethnoarcheological index about whether objective sites is pastoral site. There was considerably a problem at a stage of data collection in archeology. About a taphonomy of pastoral site related to trade, a result that an ethnoarcheological study was short was accepted.